

私の探鳥地（31）（野鳥だより102号 1995年12月）

都市近郊の森と水辺—西岡水源地—（札幌市南区）

山田 三夫

西岡水源地が公園として開放される以前の1979年から鳥の観察をしています。ということは私の鳥とのつきあいはここから始まったということです。家からそう遠くないところにこんなすばらしいフィールドを持てたのは幸運でした。1982年からやはり水源池で鳥を見ている諸橋淳氏の記録を併せ、今までに130種をこえる鳥類が観察記録されています。

ほとんどは札幌周辺の森林でのリストと同じです。しかし旧水源地を中心に、湿原、流水など変化に富んだ水辺の環境があるために水辺に関わる鳥が比較的多く観察されています。ガンカモ科はもちろんワシタカ科でもミサゴが時々観察されるなど独特の鳥類相を呈しており、特に春と秋の渡りの季節には目が離せません。



西岡公園マップ（西岡公園HPより）

このように西岡水源地の自然を考える時には「水辺」が大きなキーワードになりそうです。カイツブリ科2種、サギ科1種、ガンカモ科14種、クイナ科3種、シギ科4種、ヒレアシシギ科1種、カモメ科1種、カワセミ科3種、セキレイ科4種などなど全体の25%近くが水辺があってこそやってくる鳥でしめられているのがわかります。

1989年には環境庁が選定した「ふるさと生きものの里」にも指定されました。ヘイケボ

タルの道内有数の生息地としても知られ、トンボについては平塚和弘氏の報告によると 40 種が記録され、これは単一湖沼としては道内で第一位だということです。さまざまな生きものがいるということは複雑な自然環境があるということです。このような多様な水辺が森林とセットされたかたち、170 万人都市のすぐ近くにあるというのは、なんと感動的なことでしょうか。いつまでも大切にしたいと思うのです。

しかし都市周辺の自然は、いつ

も危機にさらされています。この 10 年間で 2 度もの開発計画が持ち上がり、その都度「反対」であることを行政側に理解してもらいましたが「なぜなのだろう」という気持ちはなかなか拭いきれません。

さて冬の西岡ですが、もう十年以上前から給餌台を設置しています。常連に混じってミヤマホオジロもやってきたりします。ぜひ一度お訪ねください。